『源平闘諍録』（全注釈　福田豊彦・服部幸造　講談社学術文庫）

※（　）の読み仮名は講談社学術文庫のまま、（註：　）と赤太字は引用者

巻八之上

七　緒方三郎維能、筑紫を鎮むる事　付けたり　先祖の謂れ

豊後国は刑部卿三位頼輔の国なりければ、其の子息頼経国司代と為て下向の間、披露しけるは、「平家年来朝敵と為て、都を出で、落ち下る所に、九国の輩（ともがら）悉く皈伏（きふく）の条、既に甚だしく罪科を招く所業なり。須く当国の輩においては、故（ことさら）に其の旨を存じて、聊かも成敗に随ふべし。是れ全く私の下知に非ず、併ながら一院の院宣なり。凡そ鎮西の輩、一味同心に九国の中を追ひ出だし奉るべし」とぞ申しける。

緒方の三郎、豊後国より初めて、九国二嶋に弓箭を取る輩に之を触れければ、臼木（註：臼杵）・辺津木（註：戸次）・原田の四郎大夫・大蔵の種直・菊地（註：菊池）の次郎高直の一類のみ平家に属きたりけるが（註：臼杵と戸次は緒方三郎と同じく大神一族であり、原田らと共に平家に属したことはなく、脱文がある）、其の外は皆維能（註：これよし、惟栄）が下知に随ひけり。

彼の維能は武き者の末にて、国土を打つ取らんと欲（す）る程の大気（おほけ）無き者なりければ、九国においては随はぬ輩も無かりけり。昔、豊後国に田村と云ふ所の主に、大夫と云ふ者の娘に、加志原の御（おもと、註：

地元では「華之本」）とて容貌雙び無し。国中に同じ程の者、婿に成らんと所望しけれども、敢て此れを用ゐず。只「吾より重上りたる者を」とは思へども、然るべき者無かりけり。秘蔵の娘にて、後園に一宇の屋を作りて、此の娘をぞ住ませける。高きも賤しきも男と云ふ者をば通はせず。

此の娘、秋の長き通夜（よもすがら）、徒然の間に詠（なが）め明かすに、何（いず）くより来たるとも覚えぬ尋常なる男の、水色の水干着たりけるが、此の所に差し寄つて、様々の物語有りけり。且（しばし）は韜（つつ）みけれども、夜々度重なり行きければ、此の女房打解けてけり。其の後、夜枯れもせず通ひけるを、暫しは此れを隠しけれども、属し仕はれける女童部（めのわらは）、父母に此れを是（かく）と語りければ、此の女房の親大きに驚いて、急ぎ娘に事の由を問ひけるに、敢て此くとも言はざりければ、父母腹立ちける間、親の命に背き難きに、「来るをば見れども是を知らず」と、有りの任（まま）に語りければ、母之を恠（あや）しみて、「然らば彼の人の来たりたらん時、験（しるし）を為て其の行柄（ゆくへ）を尋ぬべし」と、懇ろに教へける間、或夜、彼の男来たりけるに、水干の頸に糸途（しづ）の小環（おだまき）の端を針に付けて指しにけし。

夜明けて後、親の方へ此くと告げたりければ、寔（まこと）に糸途の小環を繆（く）り引きて、千尋百尋に引き延べたり。大夫父子三人、男女の家人四五十人、急ぎ彼の行柄を尋ねける程に、日向国に深山有り。嫗（うば）が嶽（註：祖母山、かつては「姥嶽・うばだけ」と呼ばれた）と云ふ嵩の怖し

き岩室が穴へぞ引き入りたりける。

彼の穴の口にて聞くに、大きに痛み悲しむ声あり。人皆身の毛弥堅（よだ）つて、恐しさ限り無し。父の教へに依つて、娘糸を牽（ひか）へて、「此の穴の中に何なる者が有る」と問ひければ、大きに恐しき声にて、「吾は其れへ夜々通ひし者なり。去る夜、頸に疵を負ひて痛み限り無ければ、這い出でて見たけれども、日来の変化既に尽きたり。今は何をか隠すべき、吾が身は本体大蛇なり。争（いかで）か見え奉るべき。但し其の腹の中に一人の男子を宿せり。必ず安穏に長（そだ）つべし。草の影にても守るべし。人畜形は異なるといへども、子を思ふ道に替り目は無し」と、是れを最後の語（ことば）と為て、後は音もせず。大大夫を始めと為て、恐ろしさ斜めならず。惶（あわ）て騒いで逃げ返りぬ。

然る程に、月日漸く累（かさな）りて、此の娘徒（ただ）ならず。其の期に至つて一人の男子を生みけり。成長するに随ひて、容顔人に勝れ、心様武き者にてぞ侍りける。博多の祖父が片名を取つて、大太とぞ云ひける。足にはあかがり（病ダレに芻、右に皮）に破れたりければ、異名にはあかがり大太とぞ申しける。

今の維能は大太が五代の孫なりければ、心武く怖ろしき者なりけり。院宣を蒙りぬる上は、興に入つて数万騎の兵を引き将（ゐ）て、太宰府へ発向す。

然る間、九国の者共皆随ひにけり。

八　主上を始め奉り、平家、宇佐宮参詣の事

十月十日、主上を始め奉つて、女院・先の内府以下の一門、皆宇佐宮へぞ参られける。社頭をば主上の皇居とし、廊をば月卿・雲客の居とト（し）む。大鳥居をば五位・六位の官人等堅めたり。庭上には四国・九国の兵並み居たり。祈請の趣は、只主上旧都の還幸をぞ申されける。七日参籠の明方に、先の内府夢想の告げを承る。大菩薩一首の御詠に云はく、

世中濃宇佐神無者　何祈覧心尽尓

＜世の中の宇佐には神もなきものを　なに祈るらん心づくしに＞

思ひ耶、彼の蓬壺の月を此の会場に写すべきとは。九重の雲の上、久方の花月に交りし輩、今更に思ひ出だされて、声声に口ずさみ給ひけり。

九　平家、緒方三郎に筑紫を追ひ出だされ、四国へ渡り給ふ事

十月五日、緒方の三郎維能、子息の野尻の次郎維村（註：惟村）を使者と為（し）て、平家へ申し遣はしけるは、「維能御恩をも蒙つて候ひき。相伝の君にて渡らせたまふ上、十善の帝王に御坐（おはしま）せば、尤も奉公仕るべく候へども、早く九国の内を出だし奉るべき由、院宣を下され候ふ間、力及ばざる次第なり。疾疾出でさせ御坐せ」と申したりければ、平大納言時忠卿、野尻の次郎に出で向つて言ひけるは、「吾が君は天孫四十九世の正統、天皇八十一代の御門なり。忝くも太上法皇の御孫、高倉院の后腹の第一の王子にて

渡らせ給ふ。伊勢大神宮入れ代らせ給ふ覧。御裳裾河の流れ忝き上、神の代より伝はれる三種の神器を帯して御坐す。正八幡宮も定めて守護せさせ給ふ覧。争か輙（たやす）く傾け奉るべき。其の上当家は、平将軍貞盛、相馬の小次郎将門を追討せしより以降（このかた）、故入道相国、悪衛門督信頼を誅戮せしに至るまで、代代朝家の固めとして帝王の守りと成る。然るに頼朝・義仲が『吾軍（いくさ）に打ち勝たば、国を知らせん、庄を取らせん』と云ふに賺（すか）されて、烏滸（をこがま）しき者共が、亶顔（シハツレナ）く官兵に向かつて軍さ為るこそ不便なれ。就中、筑前の者共は殊に恩恵を蒙れる奴原が、其の好みは忘れて当家を背き、鼻豊後が下知に随はんことこそ然るべからね。能能計ふべし」と言へば、維村「此の由を披露仕り候はん」とて、急ぎ還つて、父に此の由を云ひければ、「是は何に。昔は昔、今は居間の世の中なり。院宣を下されける上は子細にや及ぶ」とて、博多へ押し寄せて時を作りたりければ、平家方には肥後守貞能を大将軍と為て、菊地・原田の一党禦ぎ闘ひけれども、三万騎の大勢責め懸りければ、取る者も取り敢へず、太宰府をぞ落ちられける。

彼の憑しかりし天満天神の注連の辺りを心細くぞ立ち離れ給ひける。下向の道の法施にも、只主上旧都の行幸とのみ申されけり。垂水山を越えて、鷲の浜をぞ通りける。御輿はは有れども仕ふべき駕輿も無ければ、主上は次の御輿に奉り、女房・男房・公卿・殿上人は増して物に乗るにも及ばれず。或いは衣の妻を取り、或いは指貫の側を挿み、歩行跣足（かちはだし）にて、

波だと共に攬暗（かきくれ）て、筥崎の津へ迷ひ出でられける心の内こそ無慙なれ。

大宰府と、筥崎と申すは、其の間西国路三里隔つたり。下臈は輙（たやす）く一日に度度行き返る所といへども、何習（いつなら）はしの歩路なれば、其の日一日に行き暮れて、夜深け更闌（かうたけなは）に至るまで猶叶はず。比（ころ）は八月下旬の事なれば、闇黒くして、誠に天の譴（せめ）を蒙れるか。境節（おりふし）降る雨は車軸の如し。吹く風は砂を颺（あぐ）るに似たり。落つる涙、過ぐる村雨、何れと別きて見えざりけり。其の内に有りと有る貴賤男女、近きは手を取り組み、遠きは詞を通はす。声は聞けども姿は見えず。中有の衆生、地獄の罪人も此れには過ぎじとぞ覚えける。

通夜（よもすがら）泣き明かし、暁に成りければ、船に混み乗り出でんと欲（し）たまひけれども、浪風邪冽（はげし）くて叶ふべくも無し。震旦・鬼海・高麗・天竺に至るまでも落ち行かばやとは思へども、叶ふべしとも覚えねば、涙と共に悲しむ処に、山鹿の兵藤次秀遠と云ふ男、悦びの耳を聞く様に覚食（おぼしめ）されて、山鹿の城へ移り入らせ給ふ。岩戸の少卿大蔵種直は、年来の同僚を始めて見上げん事も石流（さすが）に覚えて、「大地山の関上（あ）けて参らん」と申して、己が国へぞ返りける。

〔中音〕平家は山鹿城に遷って、暫く此こに栖む。厥（そ）れも始終有るべき様も無くて、柳と申す所に移りけり。其れも僅かに七箇日御坐して、柳の御所を出でたまふ。高瀬船と申す小船に混み乗り、何くを指して行くとも

無く、海上遥かに浮かび給ひけり。

清経の左中将、「都をば源氏に追はれ、鎮西をば維能に追ひ落とされ、運程に顕はれたり。何くに行くとも遁るべきかは」とて、船の舳に立ち出で、西に向かひ閑に経を読み念仏申して、海に入りて失せられにけり。女院・二位殿、女房達「袷（あれ）は何（いか）に」と声を揚げて立ち並び、嘔（をめ）き叫び給ふ。公卿・殿上人「如何に為（せ）ん」と歎き合ひ給ひけり。然れども、二度とも見えたまはざりけり。

（略）